令和７年４月22日（火）14:00～16:00
場所 裾野高校 会議室

静岡県立裾野高等学校 学校運営協議会議事要約

1　校長あいさつ（鎌田正幸校長）
　赴任の挨拶　学校運営協議会の趣旨の確認　校長通信（学校ウェブサイトに掲載中）の紹介　任命状の配布　自己紹介
2　任命状交付・自己紹介
　山本 睦委員（常葉大学保育学部教授）
　髙橋智浩委員（裾野市社会福祉協議会）
　小田圭介委員（総務省地域力創造アドバイザー）
　志田忠弘委員（NPO 法人理事）
　田口智美委員（PTA 会長）
　　学校側参加者：鎌田校長、大石副校長、芹沢教頭、岸本事務長
3　静岡県立学校における学校運営協議会の設置に関する規則及び要綱について(副校長)
4　静岡県立裾野高等学校における画工運営協議会の設置に関する要綱について
5　会長・副会長の選出　会長：高橋委員、副会長：小田委員
6　議事：議長　高橋会長
(1) 学校運営計画と教育方針
　令和７年度の運営計画では、昨年度の評議委員会の意見を反映したスクール・ミッション及びスクール・ポリシーを策定。重点項目は「挑戦力」「変化への対応力」「自己肯定力・同僚性の向上」。具体的な数値目標として以下が設定された。
- 教員研修の定期実施
- 基礎力診断テストの理解度向上
- 年間読書数４冊以上
- 進学・就職希望者の第一志望合格率向上

　委員からは、数値目標が教育の本質を損なわないように慎重に扱うべきとの意見があり、校長も評価基準としての意義を強調しつつ、結果として目標が達成されることが望ましいと述べた。
(2) 意見交換
ア　地域貢献と裁量枠
　地域貢献枠の活用が進み、受験生の関心が高まりつつある。地域活動を軸に進学する生徒の増加を期待し、裁量枠の拡充が議論された。裁量枠の対象生徒には、リーダーシップを促す指導が行われ、地域貢献が評価される体制が強化されている。
イ　表彰式の文化
　裾野高校では表彰式で拍手をしない伝統があることが議論された。委員は、努力を称

える場として自然な拍手を取り入れるべきと提案。校長は、警察学校の厳粛な式典と比較しつつ、裾野高校においては表彰時の拍手が適切であるとの認識を示した。

ウ　盗難・いじめ対策

校内の盗難問題への対応として、監視カメラ設置、被害届推奨が進められている。いじめ対策では、定期的なアンケートの実施や面談の強化が行われているが、外部機関との連携強化の必要性が指摘された。盗難は犯罪であり、学校だけで解決せず、捜査機関の介入を検討すべきとの意見も出た。

エ　ボランティア活動の強化

部活動単位でのボランティア活動の必要性について議論され、活動の継続的な実施と地域連携が求められた。部活動の顧問が生徒にボランティアの意義を伝え、実施を促す役割を果たすことが重要とされた。また、ボランティア情報を学校内で共有し、生徒の参加を促進する工夫が提案された。

オ　進学の可能性と総合型選抜

裾野高校の生徒の進学に対する意識改革が議論された。大学進学を遠いものと感じる生徒が多い中、総合型選抜の活用を推進するため、進学指導に強い教員の配置が望ましいとの意見があった。校長も、進学の可能性を広げる体制整備の必要性を認識し、教育委員会への要望を検討するとした。

カ　保育・教育系進学の改革

保育業界では短大から四大への移行が進んでいるにもかかわらず、裾野高校の生徒が短大を選択する傾向があることが指摘された。これに対し、四年間の学習を通じたアカデミックライティングや管理職への道の重要性が議論され、進路指導の改善が求められた。ヨーロッパの教育事情に倣い、大学院進学を視野に入れた教育を推奨する意見も出た。

キ　SNS の影響と思考力の低下

SNS の普及により、将来をじっくり考える時間が減少していることが懸念され、進路選択における慎重な検討の重要性が指摘された。高校の先生による適切な進路指導が不可欠であり、特に短大進学に関する情報の提供が求められた。

7　諸連絡

裾野市社会福祉協議会の活動と教育連携の提案

裾野市社会福祉協議会は福祉教育を通じて、介助技術だけでなく問題解決能力の育成を目指している。隣町の長泉では高校生が自主的に災害支援活動を計画・実行した。地域貢献活動は高校生の主体性を育む機会となる。今後は小・中・高校の連携を強化し、組織的な支援体制を構築する予定である。